

報告

心の居場所づくりをめざした学校図書館の運営; 図書委員会の活動を通して

浅川 功治

(学校法人甲南学園甲南小学校 教諭)

Fostering a warm-hearted environment at school libraries through student committee activities.

By Koji ASAKAWA

(Teacher of Konan Elementary School)

1 はじめに

文部科学省の初等中等教育局は、「子どもの読書サポーターズ会議」を平成 19 年度に設け、子どもの「読む・調べる」習慣に取り組むための方策や、学校図書館を充実させるための方策について調査研究を行ってきた。平成 21 年 3 月には「これからの学校図書館の活用の在り方等について」という報告書を出している。報告書では、学校図書館の機能・役割として、児童生徒の「読書センター」及び「学習・情報センター」としての機能や「教員サポート」機能のほかに、その他の機能として、子どもたちの「居場所」の提供、家庭・地域における読書活動の支援を挙げている¹⁾。同報告には、学校図書館の活用高度化に向けた視点の一つとして、「いつでも開いている図書館、必ずだれかいる図書館を実現し、『心の居場所』となる学校図書館づくりを進める」とある。そして、考えられる取組の例として、「児童生徒による図書委員会の活動を組織化し、司書教諭等による人的体制の補充として、学校図書館運営へ主体的に参画させる」と書かれている。

ところで「図書委員会」については、『図書館情報学用語辞典』は、「その活動は、本の貸出、返却など日常的業務を当番によって行う当番活動と、資料整理、調査統計、広報などの仕事を分担する係活動に分けられる」²⁾としており、「居場所づくり」という側面は示されていない。しかし、「図書委員会」の活動と子どもの「居場所」の提供は密接につながっていると筆者は考え、その立場から以下に論究する。

学校図書館を「居場所」と関係づける先行研究としては、久野³⁾が挙げられる。久野は、学校図書館は、生徒が校内においてやすらいで過ごすことができる場所の一つとなっていることを指摘している。そして、生野高校での「図書企」(図書企画実行委員会)という自主的に組織された委員会の企画を通して、学校図書館が生徒の「第三の場」としての機能に寄与しているということを述証している。

また、新居(2020)は、学校図書館の機能の一つである「過ごす場所としての学校図書館」に注目している。学校図書館が、「学校復帰等の際に不登校生徒が過ごしたり、学級になじめない子供が昼

休み時間等を過ごしたりする場所としても機能することが求められる」と述べるとともに、「一部の生徒が過ごす場所として機能するということは、校内における第二の保健室として学校の周縁に位置づけられている」ことに過ぎないと批判している 4)。つまり、学校図書館の利用対象は一部の生徒に限定されているわけではなく、校内のあらゆる生徒が利用できる場所でなければならないという。

学校図書館と居場所について論じた研究は複数あるものの 5)、「心の居場所」と「図書委員会」の関係には言及せず、特に小学校に関した論考は見当たらない。

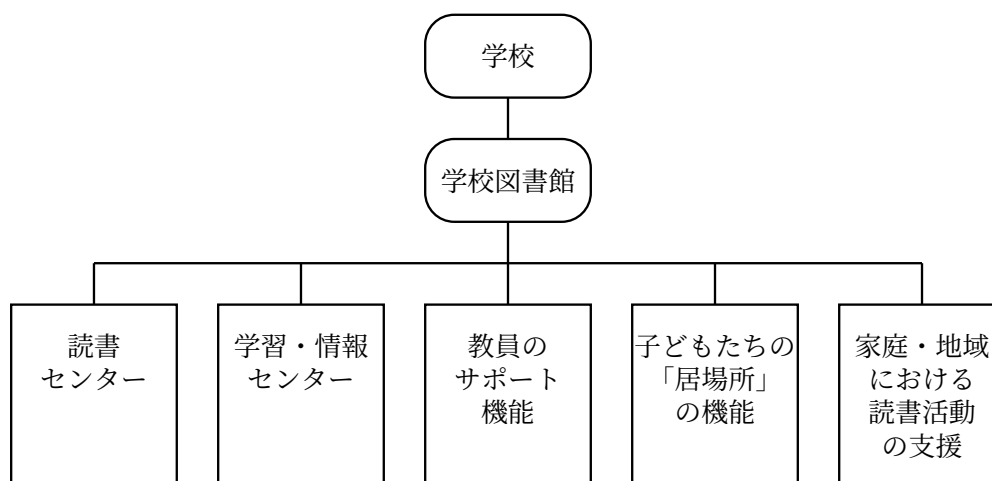
本論考では、甲南小学校における実践を取り上げ論考する。甲南小学校には学校司書が常駐しており、学校司書と教諭が連携しながら、児童の「主体的・対話的で深い学び」をめざした図書委員会の活動を進めている。そこにおいて、学校図書館の機能の一つである、子どもたちの「居場所」の提供に注目した、甲南小学校における「図書委員会」の取り組みを確認した。この実践をもとに、小学校段階での学校図書館における心の「居場所」づくりについて考察する。

2 学校経営における学校図書館の役割

学校図書館法第 3 条によると、学校図書館は、すべての学校に置かなければならないものとされている。第 2 条では、学校図書館の目的について述べているが、「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成すること」とされている 6)。

学校経営上の学校図書館の役割をまとめると、以下の図 1 のようになると考える。

図 1 学校経営上の学校図書館の役割



2.1 学校における「心の居場所」

ここでは、図の中の「子どもたちの『居場所』の機能」に注目したい。休み時間や放課後の学校図書館は、教室内の固定された人間関係から離れ、児童生徒が自分だけの時間を過ごしたり、異年齢のさまざまな人々とのかかわりを持ったりすることができる場となる。甲南小学校においては、学校司書が図書館に常駐しており、休み時間や放課後も学校図書館を利用することができる。児童も学校図

書館を利用し、校内における「居場所」としているケースも多くみられる。一人読書にふける児童もいれば、友達と一緒に訪れて本について語る児童、学校司書と話をしに来る児童など、その利用目的はさまざまである。学校図書館が常にかいていなければこのような様子は見られないだろう。

2.2 学校司書と学級担任の連携

現在、日本の学校では「チーム学校」という言葉が浸透し、学級担任が一人で問題を解決していくのではなく、校長のリーダーシップのもと、学校にかかわるすべての人々が連携しながら学校運営に参画している。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、スクールロイヤーといった心理や福祉、司法面での連携も行われつつある。もちろん、学校司書も学校の一職員として、「チーム学校」の運営に携わることになる。

甲南小学校においては、学校司書が職員会議にも出席しているので、学校司書自身も学校運営や児童の様子について理解することができる体制になっている。心の問題を抱えた児童についても情報共有することで、学校図書館を訪れる児童の様子についても共有することができている。

連携する上で、図書館として考えておかなければならないのが、「図書館の自由に関する宣言」である 7)。宣言の第 3 には「図書館は利用者の秘密を守る」とある。その箇所を抜粋する。

1. 読者が何を読むかはその人のプライバシーに属することであり、図書館は、利用者の読書事実を外部に漏らさない。ただし、憲法 35 条にもとづく令状を確認した場合は例外とする。
2. 図書館は、読書記録以外の図書館の利用事実に関しても、利用者のプライバシーを侵さない。
3. 利用者の読書事実、利用事実は、図書館が業務上知り得た秘密であって、図書館活動に従事するすべての人びとは、この秘密を守らなければならない。

例えば、宣言の第 3 を厳格に守ろうとすると、児童がいじめや自殺に関する本を読んでいた時にも、読書事実を外部に漏らしてはならないのである。また、図書館の利用事実についても秘密を守らなければならないのである。ただし、「外部」というのが「学校」の外という意味なのか、「学校図書館」の外という意味なのかで意味合いはずいぶん変わってくる。学校司書が児童の変わった様子に気づいた時には、学級担任に伝えてもよいものなのか、「チーム学校」と「図書館の自由に関する宣言」のジレンマについては、改めて論ずることとして、学校司書と学級担任（と学校にかかわるすべての人びと）が連携して、心の「居場所」である学校図書館の役割の重要性を認識し、児童の成長に寄与していくことは大切であるといえよう。

3 学校における児童会活動と「図書委員会」の役割

学校図書館を心の「居場所」とするためには、休み時間や放課後に開館していることを前提として、児童生徒が入ってきやすい場所でなければならない。また前述したように、異年齢と交流できる場である必要があると考える。

学習指導要領では、「第 6 章 特別活動」において、児童会活動が定められている 8)。児童会活動は、「異年齢の児童同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画

を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組む」ことを目標としている。内容としては、「学校生活の充実と向上を図る活動を行うこと」としており、その中の一つに「異年齢集団による交流」が挙げられている。

日本の多くの小学校には、児童会活動の一つとして、「図書委員会」が設置されている。一般的には、書架整理や貸出補助などの業務の一端を担うことが多い。

甲南小学校においては、「図書委員会」の児童が、「本を好きになってもらうために何をすればよいか」、「学校図書館に足を運んでもらうためにどうすればよいか」、「特定の本だけではなく、なかなか借りられていない本に光を当てるにはどうしたらよいか」、「学校図書館でできるイベントを企画しよう」といったテーマを設定し、学習指導要領にも定められているように、児童たちが協力しながら、自主的、実践的に活動を行っている。

令和3年度に行った実践を紹介したい。

3.1 甲南小学校「図書委員会」の実践

「図書委員会」では、どうすれば学校図書館に活発に足を運んでくれるのかを考え、話し合った。その中で以下の3つの活動を行うことにした。1つ目が、図書委員がおすすめの本をもう一度読み直し、おすすめの場面を絵にしてブックカバーを作るということと、おすすめの内容を短い言葉にして帯に書くという活動である。2つ目が、図書委員がそれぞれテーマを決め、そのテーマにあった本を集めて、段ボールで作った本棚に入れて学校図書館の入口前に置くという活動である。3つ目が、本を借りたら飴の包み紙を模したセロファンにくるまれたくじが引けるという活動である。

3.1.1 お気に入りの本の帯とブックカバーを作ろう

お気に入りの本の帯とブックカバーを作る活動は、図書委員の児童が全校生に一度は読んでほしい名作を選んで、もう一度読み、特徴的な場面を絵にかいてブックカバーにし、本を手にとってもらえるようなキャッチフレーズを考えて帯を作るというものである。

2人組になって本を読み(図2)、感想を伝え合いながら、協力して作っていた(図3)。図書委員

図2 本を読み合う図書委員会の児童



の児童が『ジャックと豆の木』や『手ぶくろを買いに』などの名作を改めて読むことで、作品の良さ

図3 ブックカバー作りの様子



を感じている様子であった。作ったブックカバーと帯は一定期間本に装着して、学校図書館の入口付近の書架に置いた。学校図書館にやってきた児童は興味を持って本を手に取り、返却待ちができるほどであった。図書委員の児童が作った作品の一部を図4に掲載しておく。

図4 完成したブックカバーと帯



3.1.2 テーマ別段ボール本棚を作ろう

テーマ別段ボール本棚作りは、低学年・高学年別にテーマを決めて、テーマに合う本を集めて段ボールで作った本棚に入れた。本棚には何のテーマで集めたのかを明記し、説明書きも付した。また、本棚には図書委員が各自で装飾を行い、本を手にとってもらえるように意識して作っていった。

例えば、低学年では、「ドラえもん」、「夏」といったテーマで、高学年では「アガサ・クリスティー」や「エリック・カール」といったテーマで本棚を作っていた。本棚は1か月間、学校図書館入口付近に置いたが、学校図書館にやってきた児童はまず本棚の本を手にとって読んでいた。学校図書館の外にも一部を置き、学校図書館に入ってみたくするような工夫をした。図5は、図書委員の児童が作った本棚である。

図5 テーマ別段ボール本棚



3.1.3 ハロウィンイベントをしよう

図書委員の児童は図書館でイベントをしたいという思いを強く持っていた。コロナ前は「図書館夏まつり」と題したイベントを行っていたので、低学年の時に楽しかったという思い出があるのだろう。「図書館夏まつり」は、本を借りたら釣具で磁石を付けた折り紙の魚を釣って、その中に書かれている特典がもらえるというイベントある。特典とは、貸出冊数1冊増冊券や、図書委員手作りしおりプレゼントなどである。令和3年度はコロナ禍でなかなか図書館のイベントがしにくい状況ではあったが、秋になると、感染状況に落ち着きが見られたので、図書委員の児童主体でハロウィンイベントを行うことにした。本を借りたら、ハロウィンのお菓子(飴)を模したもの(図6)が1つもらえ、

図6 ハロウィンイベントの特典



その中に特典がついているというものである。特典は前述したとおりである。休み時間に実施したハロウィンイベントには、普段から本を借りている子だけではなく、普段外遊びをしているような子も含めて、非常に多くの児童が参加し、本の貸出冊数も伸びた。

3.2 「図書委員会」の活動とその意義

これまで述べてきたように、「図書委員会」の児童生徒が主体的に活動することによって、学校図書館が活性化し、楽しい雰囲気の学校図書館を作っていけるといえるだろう。そして、学級で嫌なことがあったとしても、休み時間には図書委員会が企画した学校図書館のイベントを楽しみにやってくることもできる。さらには、学校図書館が児童生徒の心の「居場所」との期待が持たれている。

4 考察; 児童生徒が生かされる学校図書館の運営

以上、甲南小学校における「図書委員会」の実践を記した。

ただし、上述をもってただちに学校図書館が児童生徒の心の「居場所」となり得ているとはいえない。その実証は、児童生徒にとって学校図書館が明るい場であり、居心地のよい場になっている現実の提示にかかるだろう。甲南小学校では、「図書委員会」の児童が休み時間に必ず学校図書館にやってきて、下級生に声をかけたり、イベントを実施したりしており、活気のある場所となっている。以前は当番を決めてしていた時期もあったが、令和3年度は児童が主体的に活動しており、「図書委員会」の仕事に誇りとやりがいを感じていると考察できる。図書委員が生き生きしているのも、学校図書館を訪れる下級生も自然と楽しい気分になってくる。生き生きと活動しているのは、「先生にさせられている」のではなく、「自分たちで課題を設定し、学校図書館をよくするためにどうすればよいのか」という問題解決を主体的に行っている」からだと考えられる。

以下に、これまで論じてきたことの根拠となる、図書委員会に携わっている学校司書と図書委員会児童の感想とまとめを記す。

・学校司書 (田代弘子氏)

学校図書館が、本を借りるだけの場ではなく、心の居場所になっていると感じられることは、日々の図書委員会活動に垣間見ることができます。例えば、役に立つ事がしたいと思う児童、少し教室から離れたいと感じる児童、転校生などが図書委員会のイベントの作業を手伝うことがあります。そこで、やりがいを感じた児童は次の年に図書委員会の正式メンバーになって活躍します。作業しながら話をすることで、学年間はもとより学年を超えたつながりが自然に生まれていくのです。また、前に出るのが苦手な児童が、低学年の教室に人形を持って読み聞かせに行き、大きな歓声と拍手をもらい、その後、握手会が行われました。このようなことは、児童の自尊心を芽生えさせます。そこには、本を読む読まれる以上の空気感があるように感じます。図書委員会は強制ではありませんから、自主性を問われます。前に出て表現したい児童、動画づくりなどで貢献する児童、作業を黙々とする児童、アイデアを出すのが上手な児童、人を集めるのが上手な児童と、それぞれの役割を生かして年間のイベントが決定します。ですから、自分に合った特性を活かして誰かを笑顔にする喜びを感じられる場となっているのです。

・図書委員会 5 年児童 N さん

図書委員会でやりがいを感じたことは、弟や友達に、頑張って用意したイベントなどが楽しかったと言ってもらえた時や、私がおすすめした本が面白かったと言ってもらえた時です。また、読み聞かせをした時に、「他のシリーズもあるので借りてみてください」と言ったら、「借りる」と言ってもらった時とか、面白かったと言ってもらった時にもやりがいを感じます。

・図書委員会 5 年児童 Y さん

図書委員会でやりがいを感じるのは、図書館でのイベントの企画を立てている時です。イベントとかで顔を覚えてもらって、下級生に声をかけてもらう機会が増えたのがうれしいです。図書委員会の仕事で時間が埋まっている毎日が楽しいです。N さんと一緒に毎日朝貸出や返却をするのも楽しいし、本を読む人が増えて嬉しいです。

学校司書の感想からは、学校図書館が子どもたちにとっての心の居場所となっており、学年を超えた交流を通して、つながりが生まれる様子が描かれている。図書委員会児童にとっても、それぞれの性格に合わせた活動を行うことができていることが分かる。

図書委員会の 5 年児童の感想からは、図書委員会の活動にやりがいを感じていることが分かる。活動を通して、下級生や同級生とのつながりを持ち、フィードバックされることによって、学校図書館が図書委員会児童にとっての心の居場所になっていることがうかがえる。

最後に、令和 3 年度の 5 年生時には図書委員会に所属しておらず、令和 4 年度の 6 年生で図書委員会に所属した児童 A さんを紹介しておく。A さんは、5 年生時は朝起きられず、自律神経失調症との診断を受け、学校の遅刻してくることが多かった児童である。A さんはよく学校図書館にやって来て、図書委員会のイベントのお手伝いをしていた。そして、6 年生になり、自ら希望して図書委員会に入った。A さんが記述した文章を以下に記す。

学校図書館でやりがいを感じることは、イベントのグッズをていねいにつくって、もらった人がよろこんでくれた時です。私は何かを作るのが好きなので、それを活かせることがうれしいです。紙を折ったり、切ったりする時に心が落ち着くことが、多くあります。そして、図書館が静かで快適な所が好きです。

これまでに紹介してきた児童は、イベントを企画して実行することにやりがいを感じていたようだが、A さんは裏方に専念し、その仕事にやりがいを感じている。図書委員会の効果かどうかははっきりと検証できないが、A さんが学校図書館に居場所を感じていることは明らかだと考えられる。

このことから、図書委員会の活動が子どもたちの心の「居場所」づくりに寄与してきたということができる。また、学校図書館が、学校にいるすべての児童が生き生きとできる、心の「居場所」となることが、学校運営上も求められているといえる。

5 まとめ

学校には、保健室やカウンセリングルームなど、心に問題を抱えた児童生徒が利用する場が設置されている。しかし、いざ相談となると構えてしまい、部屋に足を踏み入れるのに勇気がいる。しかし、学校図書館は、だれもが気軽に足を踏み入れることができる場である。そして、教室の人間関係に悩んだ時にも、教室の固定された人間関係から一歩離れることもできる。学校司書をはじめ、学校図書館業務に従事する図書館員は、さまざまなレファレンスを受けるだろう。時には、レファレンスの内容が児童生徒の心の悩みの解決に関わることも出てくる。図書館員はカウンセラーではないものの、児童生徒に寄り添い、共感するといったようなカウンセリングマインドが求められるといえるだろう。そして、児童生徒の動きに敏感になり、「チーム学校」の一員として、児童生徒の心の成長に寄与していくことが求められる。

本論考では、その一つの活動として、甲南小学校における「図書委員会」の実践を紹介した。これは、学校図書館が児童生徒の心の「居場所」となるための一つの実践に過ぎない。今後、学校図書館に携わる者として、学校図書館における心の「居場所」の機能を意識して、他のアプローチでの実践も行っていきたい。

注

- 1) 子どもの読書サポーターズ会議「これからの学校図書館の活用の在り方等について（報告）」
2009.3. <https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/_icsFiles/afielddfile/2009/05/08/1236373_1.pdf>. [確認日: 2022-07-22]
- 2) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会『図書館情報学会用語辞典第5版』丸善出版, 2020, p.174.
- 3) 久野和子「『第三の場』としての学校図書館」『図書館界』63(4), 2011, p.296-313.
- 4) 新居池津子「昼休み時間を過ごす中学生から捉える学校図書館の機能—書架によって創出される場所における居方に着目して—」『日本図書館情報学会誌』66(1), 2020, p.1-18
- 5) 3), 4) の他に、学校図書館と居場所について言及した論文には以下が挙げられる。
 - 中村勇太, 海野弘樹, 桶澤舞美, 久保田愛花, 重盛裕子, 中井孝幸「行動場面からみた生徒の居場所形成について: 中学校における「場」としての学校図書館に関する研究 (その2)」『日本建築学会東海支部研究報告集』(59), 2021, p.521-524.
 - 中村勇太, 小川真央, 中田俊輝, 吉田明香里, 中井孝幸「公共図書館と複合・併設する学校図書館における利用者の居場所形成」『日本建築学会東海支部研究報告集』(58), 2020, p.301-304.
 - 瀧脇真奈, 池田光雪「心の居場所としての学校図書館に対する生徒の認識に関する一考察」『中部図書館情報学会誌』60, 2020, p.39-41.
 - 石井佳世「別室登校の児童生徒にとって学校図書館とはどのような居場所か—司書を対象とした調査から—」『熊本県立大学文学部紀要』24, 2018, p.89-99.
- 6) e-GOV 法令検索「学校図書館法」 <<https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=328AC1000000185>>. [確認日: 2022-07-22]

- 7) 日本図書館協会「図書館の自由に関する宣言」<<https://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/232/Default.aspx>>. [確認日: 2022-07-22]
- 8) 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』東洋館出版社, 2018, p.185–186.